

アサンテ連合形成過程の研究

—— アカン語族系氏族における外婚制に関する一考察 ——

ほそ み しん や
細 見 真 也

序

I 17~18世紀ころのゴールド・コースト社会

1. 部族の群雄割拠
2. 奴隷貿易

II アシャンティ族の台頭

III アサンテ連合の形成と婚姻制度

序

ゴールド・コーストの歴史をひもとけば、18世紀の初頭から19世紀末にいたるおよそ2世紀にわたって、アシャンティ族 (Ashanti) がきわめて強大な部族連合体を形成したことを知る。

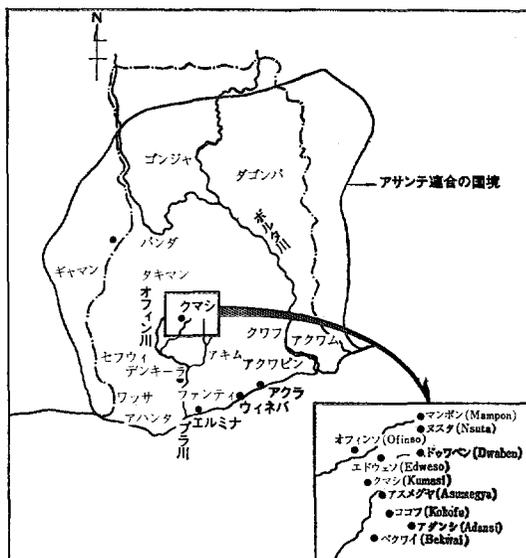
それは、R. S. Rattray などからは「アサンテ帝国」(Asante Empire) と呼ばれ、さらにまた A. K. Busia などによっては「アサンテ連合」(Asante Union) とも呼ばれ、18世紀初頭にいたるまでゴールド・コースト各地に割拠していた多数の部族のほとんどすべてを併合・統一することによって形成されたものである。そして、その最盛期には、現在のガーナ共和国を中心として、東はトーゴ領、西はコートジボアール領の一部の地域にまでおよぶ広大な領域をその支配下におさめていたのである。

それでは、いったいどのような方法によって、そのような部族連合が形成されたのであろうか。

小稿において、わたくしは、アシャンティ部族連合が形成された当時の、ゴールド・コースト社会の歴史的状況を明らかにすることによって、上

記の疑問に対するひとつの解答をひきだそうと試みたのである。

第1図 部族の群雄割拠とアサンテ連合



(出所) J. B. Webster, A. A. Boahen and H. O. Idowu, *The Revolutionary Years West Africa since 1800* (London, 1967), p. 123.

I 17~18世紀ころのゴールド・コースト社会

1. 部族の群雄割拠

ガーナ史の研究者である W. E. F. Ward (註1) によれば、17世紀から18世紀にかけて、ゴールド・コースト南部の熱帯雨林地域には、きわめて多数の部族が割拠し、たがいにその勢力を拡大しよう

として対立・抗争をくり返しており、著しく流動的な社会状態であったといわれている。

ガ族 (Ga): この時代の歴史に最初に登場してくる主要部族のひとつはガ族と呼ばれる人びとである。かれらは、16世紀初頭にはゴールド・コーストの東南部から西進してアクラ平原に移住してきたのであるが、その後奴隷貿易などの交易と、他部族からの侵攻に有利な立地条件を備えた地域を求めてギニア湾沿岸地域に移動し、およそ1610年ころにはアクラ周辺に定着した。

ところが、当時、アクラ平原を見おろすニャナオ (Nyanao) 丘陵一帯には、すでにアクラム族 (Akwamu) が居住しており、かれらは南下してその勢力圏をギニア湾沿岸地方にまで拡大しようとならっていたのである。

このような状況の中にあって、17世紀初頭から両部族のあいだには鋭い対立が生まれ、その後1660年ころまでのあいだにはしばしば武力衝突が起こったのである。そして、両部族は1660年にいたって、アクラ北方およそ20キロの地点にあるニャントラビ (Nyantrabi) 地区において決戦を交え、その結果、アクラム族はガ族の主力部隊を撃破した。

そこで、ガ族はこの地域から敗走し、1680年ころまでには、アクラ平原から東方にあたるギニア湾沿岸地域にいたる版図をアクラム族にあげ渡して、現在のダホメ共和国の沿岸都市であるリトル・ポポ (Little Popo) 地方に移動していったのである。

アクラム族: 17世紀末ころにガ族を追放してアクラ平原一帯の支配を達成したのち、アクラム族は、ギニア湾沿岸各地の城塞 (forts) に居住していたオランダ、ポルトガル、デンマーク、あるいはイギリスなどの商人たちとのあいだに商取引のみ

ちをひらき、他部族との戦争で入手した捕虜をヨーロッパ商人に売り渡した。

このようにして、アクラム族は、17世紀の後半にはアクラ北方のアクワピン (Akwapim) 丘陵からアクラ平原にいたる広大な地域をその支配下におさめるとともに、ヨーロッパ商人との交易も独占するようになっていた。

しかし、かれらは、それだけでは満足せず、かれらの支配していた地域の東部に隣接する砂金の豊富なビルム溪谷 (Birrim Valley) を支配するアキム (Akim) 諸族とのあいだに、その溪谷の領有をめぐる激しい抗争状態にはいったのである。

アキム諸族: このアキム諸族と呼ばれるものはアキム・アブアクワ (Akim Abuakwa)、アキム・コトク (Akim Kotoku)、およびアキム・ボソメ (Akim Bosome) の3部族から構成されており、かれらはいずれも大アダンシ王国 (The Great Adansi State) に従属する部族にすぎなかった。ところが、かれらと同様アダンシの支配下に置かれていたデンキーラ族 (Denkyera) が独立を求めて戦争を起こし、アダンシ王国が混乱の渦中にあるとき、アキム諸族はビルム溪谷方面へ移住してきたのであり、それはおよそ1700年ころのことであったとされている。

そして、アクラム族の伝説によれば、当時はいまだアクラム族の支配下に置かれていたビルム溪谷へ移住してきたアキム諸族 (その大部分はアキム・アブアクワ族であった) は、アクラム族の大首長によりアダンシ王国からの亡命者として土地の配分を受けるなどして、この地域に定着することが許されたのである。

このように、アキム諸族は、はじめのあいだアクラム族からは亡命者として同情的に迎えられ、両部族のあいだには友好関係が保たれてはいたの

であるが、その後アクワム族の大首長が奴隷貿易に深くかかわるようになって、アクワム族の一団がアキム諸族などの商人たちを待ち伏せして捕え、それらの者を奴隷としてヨーロッパ商人に売り渡したり、さらにまた、アクワム族の大首長が自分の義父であったアキム・コトク族の首長に対して、当然支払わなければならない婚資(bridprice)の支払いを拒否したりしたため、両部族の友好関係は崩れたといわれている。

このような状況に直面して、アキム諸族は当時、かれらとおなじようにアクワム族の脅威におびやかされていたアゴナ(Agona)、オブツ(Obutu)、ゴモア(Gomoa)、およびファンテ(Fante)などの諸部族とともに統一戦線を結成してアクワム族に対抗した。

このアキム諸族を中心とする統一戦線とアクワム族との戦いは、1733年から1735年にかけて続けられたが、その戦乱状況の中において、それまではアクワム族の支配下にあったアサマンケセ(Asamankese)地区の首長が反乱するなどアクワム族にとっては不測の事態が発生し、けっきょく、アキム諸族はアクワム族との戦闘に勝利をおさめることができたのである。

アダシ族: この部族は、2代目首長エウラデ・バサ(Ewurade Basa)の治下にあった1700~35年の時期にその最盛期を迎え、モインシ丘(Moinsihills)からオダ川(Oda river)の西岸にいたる地域を支配していた。そして、かれらは当時、オダ川とオフイン川(Ofin river)とはさまれた溪谷地域に定着していたデンキーラ族をその支配下におさめ、毎年、多額の貢納を受け取っていた。ところが、アダシ王国の大首長バサの息子が、たまたま貢納金を受け取るためにデンキーラ族の首長のもとへ派遣された時、かれはデンキーラ族の一女性と

密通し、それが原因となって両部族のあいだに戦いがはじまったといわれている。

そして、首長オブオコロパ(Obuokoropa)に率いられたデンキーラ族の軍隊は、オダ川とオフイン川との合流点付近においてアダシ族の部隊と戦火を交え、これに勝利をおさめたのである。

その後デンキーラ族は、アダシ王国の首都であったアダシマンソ(Adansimanso)まで進撃し、これを破壊したため、アダシ族はアキム地方へ逃亡し、ついにはプラ川(Pra river)の沿岸地域にまで押し込められたのである。

2. 奴隷貿易

これまでのややながきにわたる歴史叙述から、17~18世紀ころのゴールド・コースト各地においてはきわめて多数の部族が、たがいに鋭く対立・抗争していたことが明らかとなった。

しかし、そのような部族間の対立・抗争がどのような原因によって起こったのかは、必ずしも明白ではない。当時、すでに隆盛期を迎えつつあった奴隷貿易に従事していたヨーロッパ商人からのアフリカ人奴隷に対する強い需要があったから、奴隷狩りを目的とするアフリカ人相互の対立・抗争が起こったのか、あるいは、本来的にアフリカ人のあいだでは対立・抗争が行なわれ、その過程で生まれた戦争捕虜が、奴隷に対するヨーロッパ商人からの需要にたまたま合致するようになったのかは連断することはできない。

ただひとつ、考えられることは、先に述べたように17~18世紀ころの当該社会においては事実として、部族間の対立・抗争がくり返されていたのであり、かれらアフリカ人たちがなんらかのかたちで奴隷貿易とのかかわりを持ち始めることによって、その対立・抗争がよりいっそう激化し、深刻の度を加えていったであろうということであ

る。

それでは、いったいどのようにして、アフリカ社会は奴隷貿易の深みにはまり込んでいったのであろうか。

この点について、B. Davidson は、奴隷貿易の発展過程を、海賊行為による奴隷売買、好戦的な同盟によるもの、そして多少とも平和的な協力関係によるものというように三段階に分けて考察している^(註2)。

すなわち、第1の段階でアフリカ社会が直面したのは、ヨーロッパ人の小部隊による襲撃だけであり、その襲撃者が海(大西洋)から来て海に帰っていくことを別とすれば、古くからみられたアフリカ各地における部族間の戦争と大きな相違はなかったのである。しかし、この方法ではヨーロッパ人自身が直接アフリカ人たちと戦闘を交えながら、しだいに奥地へ転進しなければならず、当然のことながらかれらの犠牲は増加する。

そこで、ヨーロッパ人たちは、かれら自身が直接戦闘に加わることなく、アフリカ人奴隷を捕獲するための方法を考え、それはアフリカ人首長との同盟関係によって確立した。

すなわち、ヨーロッパ人はアフリカ人首長が希望していた馬、火器、あるいはアルコール飲料などを提供することによって同盟を結ぶことができたのである。この結果、ヨーロッパ人は海賊的な戦争行為によらないで奴隷を入手することができるようになったが、同時に、かれらは首長対首長の血なまぐさい戦争に巻き込まれるようになったのである。

ふたたびデヴィドソンの言葉を借りるなら、先に述べたような荒っぽくて即座に成立する同盟体制は、アフリカのいたるところで結ばれ、特にポルトガル人はこの同盟を好んでいた。このような、

いわば好戦的な同盟は、ヨーロッパ各国の商人が奴隷貿易での独占を確保するためには必要な手段のひとつであり、その意味において、奴隷貿易を最初に行なったポルトガル人が、この種の同盟を好んで結んだことは容易に理解される^(註3)。

しかし、このように好戦的な同盟による奴隷狩りも、首長対首長の戦争にヨーロッパ人が巻き込まれるという意味において、ヨーロッパ人自身にとっても少なからぬ犠牲を覚悟しなければならないものであった。

そこで、かれらは、デヴィドソンのいうところの次の段階、つまり平和的な取引による奴隷売買へとすすんだのである。この段階にはいり、ヨーロッパ人は、それまでのように特定部族の首長に武器・弾薬などを提供し、代わりに奴隷を受け取るという方法から、アフリカ人首長たちが要求する商品との交換で奴隷を買い取るという方法をとるようになった^(註4)。

このように、アフリカにおける奴隷貿易の方法は変化した。しかし、その変化は、いかにしてヨーロッパ人の犠牲を減らしてより多数のアフリカ人奴隷を買い取るかという観点からのものであって、奴隷を供給するアフリカ社会における部族間の対立・抗争という事態にはなんの変化も起こらなかったのである。

むしろ、平和的な奴隷売買がヨーロッパ諸国の商人による過当競争をもたらした^(註5)、アフリカ人首長の要求する銃砲・弾薬などをすすんで提供するようになった結果、アフリカにおける部族間の戦争はよりいっそう激化した。奴隷貿易が隆盛をつづけていた18世紀中ころから19世紀初頭のギニア湾沿岸地域において、アフリカ人首長たちが、いかに多数の近代的な武器・弾薬を要求していたかということは、当時の奴隷売買が“銃一挺、奴

隷1人」という交換形態によって行なわれていたというデヴィドソンの指摘^(注6)によっても明らかである。

(注1) W. E. F. Ward, *A History of Ghana* (London, 1958), pp. 104~136.

(注2) バズル・デヴィドソン著、内山敏訳『ブラックマザー』(理論社、昭和38年)、88ページ。

(注3) バズル・デヴィドソン著、内山敏訳、38ページ。

J・シュレ=カナル著、野沢協訳『黒アフリカ史』(理論社、昭和39年)、176~177ページ。

(注4) デヴィドソン著、内山敏訳、90~91ページ。当時、アフリカ人首長たちが最も強く希望したものはマスケット銃 (musket) などの武器であった。

(注5) デヴィドソン著、内山敏訳、231ページ。

(注6) デヴィドソン著、内山敏訳、227ページ。

II アシャンティ族の台頭

今日、ガーナにおいてアシャンティ族、またはアサンテ族 (Asante) と呼ばれている部族の歴史、なかんずく、その発生史についてはいまだ定説とされるものは出されていない。

すなわち、デヴィドソン (Basil Davidson)^(注1) やボアヘン (Adu Boahen)^(注2) などによれば、現在、ガーナ南部の熱帯雨林地域にひろく分散しているアカン語族 (Akan language speaking peoples) の一部のものがアシャンティ族であり、そのアカン語族といわれる人びとは、現在のオート・ボルタ、あるいはマリ共和国やダホメー共和国などの地方から、15~16世紀ころに移動してきたものであるとしているのに対し、メイロヴィッツ (Eva L. R. Meyerowitz)^(注3) は、その考古学的分析にもとづいて、アサンテ族は、現在のリビア共和国の一地方から南下して定着したものであると説いているのである。

このように、アカン語族の発生史と、かれらの

ゴールド・コーストにおける定着の歴史に関して、歴史学者などのあいだにおいても微妙な見解の相違があるのは事実である。

しかし、数多くのガーナ史研究家が、ほぼ異口同音に指摘していることは、アカン語族が、最初は、クマシ (Kumasi)^(注4) 南部にあたるプラ川とオフィン川の合流地点の付近に定着し、この地域で豊富に産出される黄金とコーラ・ナツの交易に従事し、当時、ニジェール川の上流域にいたマンデ族 (Mande) や下流域に定着していたハウサ族 (Hausa) などの部族とのあいだに通商関係を保っていたという点である^(注5)。

その後、アカン語族は、人口増加にともなって農地の相対的な不足が起こったこと、あるいは、かれらの南部に位置して強大な好戦的部族として君臨していたデンキエラ族による征服の脅威から回避するなどの必要もあって、およそ1600年ころには、氏族やリネージ (lineage) などの血縁的集団ごとに各地へ離散していったのである^(注6)。

このようにして、北方へ移動したアカン語族のうちのオヨコ氏族 (Oyoko clan) が、ドゥワベン (Dwaben)、ベクワイ (Bekwai)、ココフ (Kokofu)、ヌスタ (Nsuta) およびアサンテマンソ (Asanteman-so) という五つの都市国家を形成した。このうち、アサンテマンソはボソムチュイ (Bosomtwi) 湖に近いアマンシェ (Amansie) 付近に建設されたのであるが、その後現在のクマシに遷都されたといわれている^(注7)。

これらオヨコ氏族によって形成された都市国家では、最初に当該地域へ定着したいわゆる「創始家族」(founding family)^(注8) の中から選ばれた首長 (chief または king) が支配しており、五つの都市国家の首長はたがいに兄弟や伯父・甥の関係にあって、かれらはクマシの首長を中心としてデン

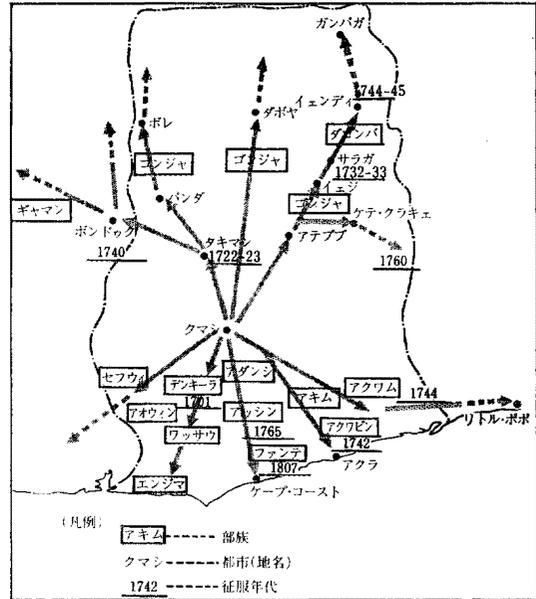
キーラ族の脅威に対処することができた(註9)。

その後、1697年にオセイ・ツツ (Osei Tutu) (註10) がクマシの三代目首長に就任するとともに、かれは、デンキーラ族の脅威に対抗しうる勢力の結集を唱えて、アスメグヤ (Asumegya) やマンポン (Mampon) などの非オヨコ氏族の都市国家を併合し、18世紀初頭には、クマシを中心とする都市国家の連合が結成されたのである(註11)。そして、オセイ・ツツはみづから新しい国家連合 (union of states) の大首長の座に就くとともに、アカン語族の信仰する最高神ニヤメ (Nyame) (註12) の司祭であるアノキエ (Okomfo Anokye) の助言のもとに、憲法の制定、四方面部隊よりなる国家軍 (national army) の創設、最高裁判所を中心とする裁判制度の確立、および国家的行事として収穫祭 (Odwira) を制定するなど、精力的に国家の統一と組織化に努力した(註13)。

このようにして、強力な国家体制が確立されるとともに、かれらアシャンティ族の諸勢力はそれまでかれらが従属してきたデンキーラ族をうち破り、クマシ地域から東西南北へのびる交易のルートを中心に支配するための軍事行動を起こしたのである。

すなわち、かれらは1699年から1701年にかけてデンキーラ族、およびその従属下にあったワッサ (Wassa)、セフウィ (Sefwi)、アオウィン (Aowin)、アッシン (Assin) およびツイフォ (Twifo) などの諸族を征服し、つづいて、1722年から1745年には、かれらの北部と西部に割拠していたギヤマン (Gyaman)、タキマン (Takyiman)、ゴンジャ (Gonja) あるいはダゴンバ (Dagomba) などの諸部族を征服していった。さらにまた、1742年から1744年にかけて、アサンテ族は南部のアキム諸族やアクラム族をもその支配下におさめていったのである(註14)。

第2図 オヨコ氏族による諸部族征服略図
(アサンテ連合形成の過程)



(出所) Basil Davidson, *A History of West Africa* (New York, 1966), p. 243.

これまでの叙述によって、われわれは、アシャンティ族がどのような歴史的状況の中において台頭してきたのかを知ることができた。

そして、かれらが、奴隷狩り戦争の横行する弱肉強食の社会において、着々と実力をたくわえ、ついにはアサンテ連合と呼ばれるほどに巨大な国家連合を形成することができたのは、まさにその軍事力の組織化によるところが大であったともいえるだろう。

事実、アシャンティ族が、きわめてよく整備された軍隊組織をもっていたことは、すでにラットレーやブシア (A. K. Busia) (註15) などによっても明らかにされているとおりでである。

そのような弱肉強食の社会において、奴隷狩り戦争に勝利をおさめるためには、軍事力を増強し、強力な軍隊を組織することが必要不可欠の条件であったことは、改めていうまでもないことなので

ある。

それでは、アシャンティ族社会における強力な軍事力の組織化は、どのようにしてもたらされたのであろうか。

次節では、この問題を、アシャンティ族の婚姻制度の側面にかぎって考察する。

(注1) Basil Davidson, *A History of West Africa* (New York, 1966), p. 242.

(注2) Adu Boahen, "The Rise of the Akan," in *The Middle Age of African History*, ed. by Roland Oliver (London, 1967), p. 19.

(注3) Eva L. R. Meyerowitz, *The Akan of Ghana* (London, 1958), p. 19.

(注4) ガーナ共和国アシャンティ州の首都。

(注5) Adu Boahen, p. 21.

(注6) Adu Boahen, p. 21.

(注7) W. E. F. Ward, p. 116.

(注8) "Royal Family" とも呼ばれる。

(注9) 当時、それらの都市国家はおよそ6万という規模の戦闘部隊を組織していたともいわれる。(W. W. Claridge, *A History of the Gold Coast and Ashanti* (London, 1964), p. 192)

(注10) クマシの首長は、初代のアケンテン (Oti Akenten, 1630~1660) からイエボア (Obiri Yeboa, 1660~1697), ツツ (Osei Tutu, 1697~1731) へと継承された。(W. E. F. Ward, p. 115)

(注11) Adu Boahen, p. 22.

(注12) B. Davidson, p. 244.

(注13) Adu Boahen, p. 23.

(注14) Adu Boahen, p. 24.

(注15) A. K. Busia, *The Position of the Chief in the Modern Political System of Ashanti* (London, 1958) (Reprint), pp. 13~16.

III アサンテ連合の形成と婚姻制度

これまでの叙述によって明らかなように、ゴールド・コースト社会にアシャンティ族と呼ばれる部族が台頭し、ついには「アサンテ帝国」とか「アサンテ連合」などといわれる強大な部族連合体を

形成するにいたったのは、まさに奴隷貿易がその最盛期を迎えんとしていた時期であり、諸部族間での奴隷狩り戦争による混乱のさ中においてであった。

それでは、先に述べたような弱肉強食の社会的混乱の中において、アシャンティ族だけが部族としての独立を維持しつつ、ついにはゴールド・コーストのほとんどすべての部族をその支配下におさめることができたのは、なにゆえに可能であったのだろうか。

それは、確かにラットレー (R. S. Rattray) (註1) などによっても指摘されているように、アシャンティ族がきわめてよく組織化された軍隊を有し、かれらが西アフリカでは最も勇猛な部族であったためであると考えられることのできるであろう。

しかし、クラリッジ (W. W. Claridge) (註2) も述べているように、当時のゴールド・コーストにおいてアシャンティ族だけが優秀な軍事機構を持ち、唯一の勇猛な部族であったのではなく、たとえば、ファンティ族 (Fanti) もまた、アシャンティ族と同様によく組織された軍隊を備えており、きわめて勇敢な部族であった。それにもかかわらず、ファンティ族はアシャンティ族によって征服されたのである。

その理由について、クラリッジはつぎのように述べている。「ファンティ族はアシャンティ族の侵入に対抗するため、巨大な軍隊をなんども出撃させ、かれらはきわめて勇敢にアシャンティ族の軍隊と交戦したけれど、けっきよくのところ、ファンティ族のあいだには部族としての統一性に欠けていたため、敗退せざるをえなかった。統一性に欠けた部族の個々人が、たとえいかに勇敢であっても、統一と組織化のすすんだ敵の軍隊に抵抗することを期待するのは不可能なのである。」(註3)

それでは、クラリッジも指摘しているようなアシャンティ族の部族としての統一性は、どのようにして形成されてきたのであろうか。

換言するなら、デンキーラ族による征服の脅威からのがれるために、一度は氏族などの血縁集団ごとに各地へ分散していったアカン語族系氏族の一部が、オヨコ氏族を中心としてふたたび結集し、デンキーラ族などへの強力な対抗勢力となりえたのはなぜかということである。

わたくしは、その理由のひとつとして、人類学という「外婚制」(exogamy) (註4) をとりあげる。

これまで、しばしば述べてきたように、アカン語族は17世紀のはじめころ、氏族などの血縁集団ごとに各地へ分散していったが、多くのばあい、それらの氏族は「双子氏族」(twin clan) であって、下記のような組合せにもとづいて婚姻が行なわれていた (註5)。

- オヨコ (Oyoko) ⇔ ダコ (Dako)
- アドゥアナ (Aduana) ⇔ アテワ (Atwea)
- アゴナ (Agona) ⇔ トア (Toa)
- アソコレ (Asokore) ⇔ エクアナ (Ekuana)
- アソナ (Asona) ⇔ ドウム (Dwum)

ベレトゥオ (Beretuo) ⇔ タナ (Tana)

ところが、オセイ・ツツがオヨコ氏族の首長となつてのち、かれは、そのような双子氏族での内婚制 (endogamy) を禁止し、それに代わって各氏族間での通婚による「氏族外婚制」(clan exogamy) の採用を決定したのである (註6)。

この氏族外婚が行なわれるようになった結果、それまでは氏族ごとにそれぞれ地域的にも孤立していた氏族集団が、たがいに婚姻関係を結ぶことによって構成される地域社会を形成していった。それが、先に述べたドゥワベンやベクワイなどの都市国家であった (註7)。

ところで、人類学によれば、外婚規定といわれるものは、たとえばリネージなどのような単位の小さな血縁集団ほど厳格に適用されるものであって、氏族、胞族、あるいは半族などになると、ときには外婚、内婚という特別の規定を持たない状態 (これを agamy という) も現われる (註8)。

さらに、G・リーンハート (Godfrey Lienhardt) は、外婚規制と近親相姦の関係について「近親相姦を禁止し、内部での結婚が禁止される集団の範囲と大きさを決めるさまざまな外婚規制を設けて

第1表 都市国家の氏族構成

都市国家 役職	ベクワイ Bekwai	ドゥワベン Duwaben	ココフ Kokofu	アスメグヤ Asumegya	マンポン Mampon	ヌスタ Nsuta
首長 (chief)	オヨコ Oyoko	オヨコ Oyoko	オヨコ Oyoko	アドゥアナ Aduana	ベレトゥオ Beretuo	ダコ Dako
右翼軍分隊長 (Ko'ntire hene)	アソナ Asona	同上	アゴナ Agona	アソナ Asona	?	アセニエ Asenie
左翼軍分隊長 (Akwamu hene)	同上	アネニエ Anenie	同上	セキエレ Sekyere	アゴナ Agona	アゴナ Agona
前衛隊長 (Gyase hene)	同上	?	?	アドゥアナ Aduana	オヨコ Oyoko	?
後衛隊長 (Kyidom hene)	アセニエ Asenie	アドゥアナ Aduana	アセニエ Asenie	同上	アセニエ Asenie	アドゥアナ Aduana

(出所) R. S. Rattray, *Ashanti Law and Constitution* (London, 1929), pp. 136, 152, 178, 204, 241, 264.

ゆくと、実際は、社会関係を絶やさず拡張してゆくことが必要となる」(注9)と述べている。

このように、外婚規定は、もともとは近親相姦の禁止の範囲を決定することから出発したものであり、拡大家族とカリネージなどの小規模な血縁集団に対して厳密に適用されるものであるが、ゴールド・コーストのアシャンティ族においては、氏族に対してこの外婚規制がかなり厳格に適用されてきたのである。

それでは、そのような外婚規制が氏族に対して適用されたことにより、アカン語族系の氏族のあいだには、どのような状態が出現したのであるか。

そのひとつは、婚姻を通じてそれぞれの氏族のあいだの血縁関係が成立し、それまではたがいに隔絶していた氏族を、血縁のきずなによって結合することができたことである(注10)。

すなわち、この氏族外婚制が行なわれる以前、アカン語族系の氏族は、それぞれ地域的に孤立状態にあっただけではなく、いわゆる双子氏族内婚を行なうことによって血縁的にも孤立し、地域集団と血縁集団とは一体となっていたのである。それが、氏族外婚制の適用と同時に崩れ、特定の地域を超える血縁関係が成立した。

そこで、先に見たように(第1表を参照)、アカン語族系氏族によって形成された都市国家には、それぞれ多数の氏族が血縁関係(婚姻は次の世代には血縁関係を成立させる)にもとづいて居住していたのであり、そのため、たとえば、ある都市国家がデンキーラ族の軍隊によって攻撃されるようなばあいには、その他の都市国家もデンキーラ族を共通の敵として認識する状況にあったと考えられる。ラットレーなどが指摘しているように、アシャンティ族の各都市国家が、ひとたび戦争状態が発生

するや否や、それぞれの軍隊を統合して「国家軍」(national army)を組織することができたのは(注11)、まさに上記の理由によるものであったといえる。

以上、わたくしは、奴隷貿易がその隆盛期を迎えようとしていた17~18世紀ころのゴールド・コースト社会が、どのような状況に置かれていたのかを、主として、諸部族による対立・抗争の側面にかぎって明らかにした。

ついで、奴隷狩り戦争による混乱のさ中において、アカン語族系の諸氏族が、しだいにその結束を固め、ついにはアサンテ帝国とも呼ばれるほどに強大な部族連合を形成するにいたった過程を、主として、その婚姻制度の側面から考察した。

そこで明らかとなったことは、当該諸氏族がいわゆる氏族外婚制をかなり厳格に適用することによって、それ以前は、時としてたがいに敵対・抗争することさえあったにもかかわらず、たがいに血縁関係を成立させることができるようになり、強固な軍事的協力体制にもとづく諸都市国家間の連合へと発展していったということである。

その連合を「部族」と呼ぶべきか否かについて、わたくしは、いまだに決断しえないでいる。そのためには、小稿において展開してきた分析作業は、あまりにも不十分であったといわざるをえないからである。今後、わたくしは、婚姻制度とは別の諸側面から「アフリカにおける部族とは何か」という問題の解明に取り組みなければならないと思う。

(注1) R. S. Rattray, *Ashanti Law and Constitution* (London, 1929), pp. 120~126.

(注2) W. W. Claridge, p. 182.

(注3) W. W. Claridge, p. 183.

(注4) アシャンティ族社会における外婚制についてはフォーテス (M. Fortes) やラットレー (R. S. Rattray) などによって詳細な指摘がなされている。M.

Fortes, "Kinship and Marriage among the Ashanti," in *African System of Kinship and Marriage*, ed. by A. R. Radcliffe-Brown and Daryll Forde (Oxford Univ. Press, 1960), pp. 252~284.

(注5) R. S. Rattray, p. 67.

(注6) R. S. Rattray, p. 67.

(注7) これらの都市国家のうち, "Asumegya", "Bekwai", "Juaben" (または "Duwaben"), "Kokofu", "Kumawu", "Mampon", "Nsuta" については, ラットレーが詳細な説明をしている。(R. S. Rattray, pp. 131~269)

(注8) 石田英一郎・寺田和夫・石川榮吉著『人類

学概説』(日本評論新社, 昭和33年), 214ページ。

(注9) G・リーンハート著, 増田義郎・長島信弘訳『社会人類学』(岩波書店, 昭和42年), 160ページ。

(注10) ジョン・ビアッティ著, 蒲生正男・村武精一訳『社会人類学』(社会思想社, 昭和43年), 162ページ。

(注11) R. S. Rattray, pp. 120~126.

J. B. Webster, A. A. Boahen and H. O. Idowu, *The Revolutionary Years West Africa since 1800*, p. 123.

W. W. Claridge, p. 182.

(調査研究部)

アジアを見る眼シリーズ(B6変型判・並装ビニールカバー付)

低 開 発 国 開 発 理 論 の 系 譜

坂 本 二 郎 著

190頁/¥ 350

躍動する低開発国諸国が, 政治的, 経済的発言の場で第三勢力としての地歩を着々と築き上げてきた今日, これら諸国の現状分析と状況の把握の理論的ベースは, いわゆる「南北問題」へと変転した。しかし著者は, このような情勢を踏まえたうえで, あえて原点に立ち返り, ハーシュマン, ミルダール, ヌルクセ, ロストロー, ティンバーゲン以下内外の80人に及ぶ経済学者の文献を取り上げ, 戦後の低開発国開発理論の再検討をし, 理論的究明を試みる。

本書は, 「南北問題」をより鮮明に浮き彫りにする意味でも, 重要な布石となる好著である。

ラテン・アメリカの開発政策

R・プレビッシュ著

大 原 美 範 訳

202頁/¥ 300

後進国による犠牲的献身の時代は終わった。しかし自由競争のもとにありながら, 市場メカニズムが社会的公正を実現しえないのはなぜか。プレビッシュは, 本書において, ラテン・アメリカの経済発展を論ずるが, ラテン・アメリカにみられる発展の阻害要因の多くは, 他の低開発国にも共通して存在する。

本書は, いわゆる「プレビッシュ理論」の神髄を解明し, 併せて低開発国開発理論を究明する。

ガ ナ 経 済 の 歩 み

細 見 真 也 著

190頁/¥300

奴隷海岸にそそり立つ古い大きな城塞には, 奴隷商人が奴隷を品定めした小さなぞき窓のある広い部屋や, 船積みのために奴隷たちが投げ込まれた古井戸がある。ここで流された大量の血と数知れぬ奴隷たちの呻吟は, 彼らの犠牲の上に築かれた今日のヨーロッパ, アメリカの繁栄と黒々としたその歴史への告発である。筆者は現地へ赴いてこれら阿鼻叫喚の傷痕を見しその衝撃と痛憤の矛先をむしろ冷帯に経済的側面からの「暗黒大陸」解明に向けられる。本書は, 躍動する今日のアフリカに散在するさまざまな問題を解明する意味でも基礎的資料となる。